

鳥よ 鳥よ 青い鳥よ

岸田 理生

■ 登場人物

男 1
男 2
男 3
男 4
女 1
女 2
女 3
少女
ダフ

Ⅰ 町の人々

雨が降っている。

ひっきりなしに降っている。

そこは雨の町。

晴れることはない。

背後に雨の町。

舞台は遠浅の海。

空間の後方には歪んだ棧橋がジグザグに作られている。

両脇に魚網の張り巡らされた階。

上手の階からは宙に突き出た一枚の板がある。

そこは町から追い出されたダフの埒だ。

今、ダフは眠っている。

下手の階を昇降するランドセルを背負った老人少年たち。

彼らは、”使ってはいけない言葉“を忘れることが出来ない為、また、”使っていい言葉“を覚えることが出来ない為、罰として永劫の昇降を命じられているのである。

眠るダフ。

昇降する老人少年たち。

不意に行進曲。

舞台、平手打ちされたように明るくなると、町の人々が命じられた朝の散歩に出かけてくる。

歪んだ笑い。

人々の顔には、笑いとともに町の住人であることを証し立てる黒丸が刻印されている。

ある者は、右眼の回りに。

ある者は頬、ある者は鼻、ある者は額に。

それは掟に抗って受けた殴打の痕と重複する

人々は、鍋や釜、杓子や鉢を頭上に翳して雨を防いでいる。

この町では傘をさすことは禁じられている。

雨は、良いもの、なのだ。

陽光は、悪いもの、なのだ。

掟に従い、だが人々は体の深奥で雨を否んでいる。拒んでいる。だが傘をさすことはできない。

だから人々は、言い逃れの傘を探し出した。

”台所のものたち“は、いつでも雨を溜める用具に変わる。

行進曲。

人々は、なかなか前進しない歩行で、やってくる。

九十九折れの栈橋をやってくる。

そして、海に至りつくと、朝の挨拶を交わし合う。笑いながら。

男3 きぶりご。(いい天気だ)

男2 ぶきりご。(いや、まったく)

男1 ぶきりご、ぶきりご。(まったく、まったく)

女1 きぶりご、雨。(雨よ、今日も)

女3 ぶきりご、雨。(そう、雨)

女2 ぶきりご、雨、ぶきりご。(そう、雨よ、そう)

女3は、松葉杖を突いている。

男2 きりごぶ？（調子はどうですか？）

男3 りきぶご、りきぶご。おたくは？（快調ですよ。おたくは？）

男1 りきぶご、りきぶご。（快調ですよ）

男たち、笑い合う。

女1 ごぶ？（どう？）

女2 ぶご、ぶご（よくてよ、とても）ごぶ？（どう？）

女3 ぶご、ぶご。（よくてよ、とても）

女たち、笑い合う。

男1 きりごぶ、歯磨き？（歯磨き、しましろう）

男2 きぶ、きぶ。（ええ）

男3 りぶごき、歯ブラシ。(新しい歯ブラシを貰いましたよ)

真新しい歯ブラシを取り出して、みんなに見せる。

歓声上がる。

それぞれ、ちびた歯ブラシを取り出して歯を磨きはじめる人々。長く、熱心に。
やがて、

男1 清潔第一。

女2 不潔は殺せ。

男3 朝、起きて、

女1 顔を洗って、歯を磨く。

男2 清潔第一。

女3 不潔は殺せ。

男3 りぶごき(町に栄えあれ)

女1 りぶごき(私たちは清潔です)

男2 りぶごき

女3 りぶごき

男 1 りぶごき

女 2 ぶりきご

歯を磨き終わると、人々は、執拗に顔を洗う。
歪んだ鐘の音。

男 1 きり、散歩。(散歩の時間は終わりだ)

女 3 きぶ。(ええ)

人々は、ごぶ？(どう?)と聞き、ぶご(とてもいい)と答え、笑い合いながら、去ってゆく。

すると、ダフが眼を覚ます。

2 ダフ

眠りから醒めたダフは、唐突に語りはじめる。

ダフ 俺の埒は狭い。入口は外から閉ざされ、出口は海だ。でたらめ馬鹿の糞つたれ。夢を見ていた。間抜け。俺はいつも同じ夢をみる。阿呆。そうして、起きた時には、夢の中味を忘れている。この野郎。

いつもいつも、俺はあいつらに起こされる。あんぽんたん。町内会の早起鳥。チイチイパツパの雀の学校。あいつらは、口を揃えて、チイチイパツパのきぶりごと言う。嘘つくなよ、抜け作。嘘ついて、きぶ、ごぶ。俺には、あいつらが何を言っているのか、わからない。氣違い。あいつらは俺を黴菌だと名指して隔離した。ど助平。本音の毒を撒き散らす黴菌。それが俺だ。犬畜生。

思い出した。言葉が海を流れて行く夢だ。あいつらの昔の言葉たちが、悲鳴をあげて波に誘われて行く夢だ。

そう、あいつらも昔は言葉を使っていた。嘘もあった。だが本音もあった。言葉を振りかざして喧嘩をしたり、言葉を包み込んで、あったかくなったりしていた。

俺は、言葉を忘れたくない。だから話す。話し相手もないのに、話す。一日中、話してい

る。

ふと、ダフは、話しやめる。

町から、空の鳥籠を持った少女がやって来たのだ。

3 少女

少女は、ジグザグの栈橋をまっすぐにやって来る。
そして、誰にもなく訊く。

少女 鳥よ、鳥よ、青い鳥

緑の豆の畑に 降りないで

豆の花が散れば

食べ物売りが泣いてゆく。

青い鳥を見ませんでしたか？ あれは、悪い鳥です。不吉な翼で空を曇らせ、尖った嘴で地面を突つく。

ダフ 言葉だ……。

少女 誰？

ダフ ここだ

少女はダフを見つける。

少女 そう、私は言葉。こんにちは。

ダフ もう一度。

少女 こんにちは。おはようの時間が過ぎて、こんにちはの時間。

ダフ おはよう、だか、こんにちははだか、わからない。いつも雨だ。一日中、雨だ。

と、雨の中に、一筋の光がさす。

少女 ほら、陽ざしよ、こんにちはの陽ざし。なぜ、そんなところにいるの？

ダフ 鍵をかけられている。

少女 どうして？

ダフ 臭いもんには、蓋だ。

少女 そこへ行ってもよくって？

ダフ ああ、いい。だが、入れない。あいつらは、俺をここに隔離して、鍵をかけ、それから鍵を捨てた。

少女 どこに捨てたの？

ダフ 海の底。あいつらが言葉を捨てた海の底。

少女 今、そこへ行くわ。

話しながら、階をのぼり、ダフに近づく少女。少女には、扉が役に立たない。

少女 こんにちは

ダフ なぜ？

少女 なにが？

ダフ 入って来た。

少女 ええ。

ゆっくりと少女に向かって腕を伸ばすダフ。指の先を触れて、少女を確認してゆく。同じ行為をする少女。

ダフ 髪の毛。

少女 髪の毛。

ダフ 額。

少女 額。

ダ 少 ダ 少 ダ 少 ダ 少 ダ 少 ダ 少 ダ 少 ダ 少 ダ
フ 女 フ 女 フ 女 フ 女 フ 女 フ 女 フ 女 フ 女 フ 女 フ
心 腕 腕 肩 肩 顎 顎 頬 頬 唇 唇 鼻 鼻 眼 眼 眉 眉
臓 。

少女 心臓。

ダフ 腰。

少女 腰。

ダフ 足。

少女 足。

ダフ 手。

少女 手。

ダフ 指。

少女 指。

ダフ 実体だ。

少女 私は、空気に似ている、もの。

水に似ている、もの。

風に似ている、もの。

陽ざしに似ている、もの。

いつのまにか、ひっそりと、忍び込む、もの。

陽ざしが強くなる。

と、町の人々が現れる。

4 光の毒

町の人々は手で眼を覆い、指と指の隙間から世の中を覗き、畸形の歩行でやってくる。
不安がある。

男2 ごぶりき。(変だ……)

女3 きぶ、ごぶりき。(ええ、変よ)

沈黙。

歩行。

男3 ごぶりき。

女1 きぶ、ごぶりき。

沈黙。

歩行。

男1 ごぶりき。

女2 きぶ、ごぶりき。

沈黙。

歩行。

男2と女3、男3と女1、男1と女2は体のどこかをくっつけ合って、やってくる。男4だけが一人で、赤ちゃん人形を抱きしめている。

男3 ごぶりき、陽ざし、りぶ。(変だ、陽ざしが降る)

女1 きぶ、ごぶりき、雨、ぶり。(変だわ、雨が止んだ)

沈黙。

歩行。

男1 ごぶりき、陽ざし、りぶ。

女 2 きぶ、ごぶりき、雨、ぶり。

沈黙。

歩行。

男 2 ごぶりき、陽ざし、りぶ。
女 3 きぶ、ごぶりき、雨、ぶり。

沈黙。

歩行。

やがて、町の人々は、立ちどまり、疑わし気に視線を交わす。

男 1 ごぶりき。

男 2 ごぶりき。

男 3 ごぶりき。

女 1 きぶ、ごぶりき。

女 2 きぶ、ごぶりき。

女3 きぶ、ごぶりき。
男2 ごぶりき、陽ざし、りぶ。

囁き交わす言葉は、次第に早口になってゆく。

男3 ごぶりき。
女1 きぶ、ごぶりき。
男3 痛い。
女1 きぶ、痛い。

男3と女1、体をくっつけ合ったまま、痙攣する。

男2 ごぶりき。
女3 きぶ、ごぶりき。
男2 体。
女3 きぶ、体。

男2と女3、体をくっつけ合ったまま、痙攣する。

男1 ごぶりき。

女2 きぶ、ごぶりき。

男1 体が痛い。

女2 体が痛い。

男1と女2、体をくっつけ合ったまま、痙攣する。

赤ちゃん人形を抱きしめて痙攣する、男4。

痙攣は、次第に速度を速め、激しくなってくる。

少女とダフは、埒の中から、それを見ている。

少女 気持ちいい。光が時の恵みのように降ってくる。あったかい。

ダフ ああ。

男2 痛い。

男1 痛い。

女 3	女 1	女 2	男 1	男 2	男 3	女 3	女 2	女 1	男 3	男 2	男 1	女 1	女 2	女 3	男 3
光 の 毒 、 ご り ぶ き 。	光 の 毒 、 ご り ぶ き 。	光 の 毒 、 ご り ぶ き 。	光 の 針 、 ご り ぶ き 。	光 の 針 、 ご り ぶ き 。	光 の 針 、 ご り ぶ き 。	光 。	光 。	光 。	光 。	光 。	光 。	体 。	体 。	体 。	痛 い 。

（降ってくる）

果てしなく体を震わせる人々。

少女とダフは、罅の中から、それを見ている。

少女 子供の頃、樹にのぼって、いろんなことを考えていたわ。樹の上は、考えごとにとてもよかった。なぜかって言うかね、螺旋のてっぺんだからよ。樹の枝は、幹のまわりをくるくるときれいに取り巻いて生えている。螺旋形に生えている。螺旋は、特別な力を持っているものよ。生き物たちは、みんな、螺旋を持っている。

痙攣していた男4が少女を見つけて、硬直し、悲鳴をあげる。

それに気付いて、硬直し、男4の視線を追う人々。少女を見つめる。

男3 黴菌がふえた。

叫ぶ。

5 風の舌

少女は、町の人々に話しかける。

少女　こんにちは、みなさん。

街の人々　言葉だ。

町の人々は、叫んで耳を塞ぐ。

少女　今、そこへ行きます。

少女は、埒の階を降りて行く。

男2　りごきぶ。(大変だ)

男1　りごきぶ。

女1　りごきぶ。

女2　りごきぶ。

女3
りごきぶ。

慌てふためく人々。

ダフは、一緒に降りようとするが、鍵をかけられた扉に阻まれる。

ダフの言葉の力では、まだ牢獄を抜け出すことはできない。

扉を打ち破ろうとするダフの、哀しい反復行為。

町の人々は、目まぐるしく動きまわりながら、話す。

男1
閉じ込めたのに。

男2
鍵をかけたのに。

男3
その鍵は、海の底に捨てたのに。

女1
入った者がいる。

女2
出た者がいる。

男4だけが棒立ちになって、ダフを凝視している。

男3
何故だ？

女 1 何故？

男 1 何故だ？

女 2 何故？

男 2 何故だ？

女 3 何故？

少女は歩く。

ダフは脱出行為をくり返す。

ダフ この町で、言葉は他人とうまくやっていくための道具だ。みんなが嘘をつき合う。嘘は潤滑油だ。一日の終わり、あいつらは、今日ついた嘘を手の平に乗せて、重さを計り合う。うまくいった一日。それはおびただしい嘘が行ったり来たりした一日だ。この町の人々は、寝言にさえ、本音を言わない。

言葉、相手を屈伏させる武器。

言葉、弁解の道具。

言葉、あまりにも放恣な想像力を引き止めるための接着剤。

言葉、溜め息にかわるもの。

言葉、過去の不運の落葉を掃き集める竹箒。

いつの間にか、男4はダフの行為と同じ行為をしている。
そして少女は、人々に近づく。

少女 おはよう、と、こんにちは、と、こんばんは、と、おやすみなさい。
男1 やめてくれ、不潔がうつる。

少女2 きぶ、りごりご、ごきごき。(ええ、不潔がうつる)

少女 さようなら、と、また明日。

男2 よらんでくれ、病気になる。

少女3 きぶ、ごりごり、きごきご(ええ、病気になる)

少女 お元気ですか？

男3 あっちへ行ってくれ。黴菌。

女1 きぶ、きりりき、きりりき。(ええ、あっちへ行って、黴菌)

だが、少女は、女たちに触れる。
やさしく、ゆっくりと。

すると女たちは、地に縛される。

少女
風の舌は、こんなふうに触れるんです。

笑みかける、少女。

女たちは男たちに言う。

女1
助けて。

女3
助けて。

女2
助けて。

だが、男たちは逃げて行く。

口々に、

男3
きりりき、きりりき。

男2
ごりごり、きごきご。

男1
りごりご、ごきごき。

と言いながら。

女たちは、置き去りにされる。

そして、いつの間にか、ダフと男4は、行為の会話をしている。
ゆっくりと月光。夜になってゆく。

6 幻化

少女は、女たちに触れる。すると、女たちは話す。

女1 あの人、どこか一本、心棒が抜けているんじゃないかと思う程、欲がなかった。

女2 あの人、いつも酒という船に乗り込んで、身を委ねているような感じだった。人と話をするのが難儀で、そのはにかみを酒でまぎらそうとしていたのね、きっと。

女3 きりりこ、きりりこ。

少女 それはもう、忘れていいのよ。

女3 兄さん、やさしかった。

女1 私たち、一緒に食べたわ、一緒に話した。一緒に笑って、一つの食卓から一つの寢床に移った。

女2 赤味の多い夏の月の下で、私たち、そうね、私たち、抱擁した。

女3 背中、大きかったわ、兄さん。

女1 私たち思っていた。思い出は、大事に光って、あまり残らないのがいい。一つの言葉、一つの出来事、一つの大事があればいい。

どこからか、やさしい太鼓の音が流れ込んで来る。

女2 たむたむ、だわ。

女1 そうね、たむたむ。

ひっそりと、地を踏みはじめる少女、女たち。そしてダフ、男4。

少女 早いたむたむ。

女3 普通なたむたむ。

女1 静かなたむたむ。

女2 愉快なたむたむ。

女1 たむたむ。

女3 たむたむ。

女1 たむたむ。

女2 たむたむ。

音は、次第に軽快になってくる。

女一 春は草摘み、たんぽぽ、よもぎ。

たんぽぽは、花が咲く前の、ごく柔らかい葉を、上の方だけ摘むのよ、よもぎも同じ。それから、葉についたごみや泥をひとつひとつ選り出して、きれいに掃除する。それが終わるころには、もう指先まで真っ黒。でも苦にはならなかった。葉っぱのみずみずしい香りを嗅いでいると、おいしさのためなら、と、不思議に我慢ができた。

少女 春は草摘み、たんぽぽ、よもぎ。

女一 摘んだその日に、まだ息をしているくらい新鮮なたんぽぽやよもぎを食べる……。私、私たちが、私たちがみんな、それが好きだった。

女二 でも、鳥が飛んで来た。群をなして飛来して、緑の豆の畠に降り立った。豆の花は散ったわ。はらはらと散った。気落ち、落胆、悔恨、無念、絶望……。そんなふうな言葉が降って来たわ。何をしても、やさしさに帰結する。そうした日々は、新しく教え込まれた言葉に鍵をかけた。きぶりご、りごぶき、ぶきりご。私、私たちが、私たちがみんな、変わったわ。

少女と女たち、ダフと男4の踏む足拍子は、次第に呪わしげなものになってくる。

女一 汗のほとばしり出る夏の中で、私たちが泥鰯を取った。

女2 取らされた。

女1 そう、取らされた。泥鰯取りは夏の大事。だから気にならなかった。でも取らされるのは痛苦。なぜって、おいしさを知っているから。取った泥鰯が口に入らないとわかっていて取られるのは吐き気。

女2 取らされた泥鰯をきれいに洗って、そこへ一つかみの塩を振りかけ、箆をかぶせる。すると暴れる、泥鰯が暴れる。

女3 最後の力を振り絞って、暴れる泥鰯、泥鰯が暴れる。

女1 泥鰯の色が変わってくる。腹の白いところが赤くなる。

女2 全部の泥鰯にパタパツと赤みがさしたら、今度は泥鰯を洗う。それから鍋に水を入れ、泥鰯を入れて火にかける。するとまた泥鰯が暴れる。暴れる泥鰯。

女3 重い重い木の蓋が開くくらい、暴れる泥鰯、泥鰯が暴れる。

女2 その内、静かになって、そうすると、蟬の音が聞こえ出す。蜂の羽音なんかも聞こえてくる。夏の夕暮れ。殺された泥鰯は静かで、火と鍋の音がことごと、ことごと。

女1 煮上がったら、次は裏ごし。私が網を持って、あの人を漉す。二人三脚。

女3 私が網を押さえて、兄さんが漉す。二人三脚。

女2 私が網を押さえ持って、あの人を漉す。二人三脚。

女1 おいしい汁と肉のたまった鍋。

女3 ぼわんぼわんの汁。

女2 水、味噌、葉っぱの泥鰯汁。ふつつつと煮えたぎる頃、鳥たちはやってくる。羽をひろげ、鼻の孔をひろげ、口をひろげてやってくる。匂いを嗅ぎ、涎を垂らし、喰うことの歡喜に翼をふるわせ、飛んでくる。

女1 そうして、喰う。

女3 そうして、飲む。

女1 そうして、喰い尽くす。

女3 そうして、飲み干す。

女2 あたりは冬。

女1 触れれば砕けそうに冷えきった空気。地面は硬く凍りつき、寒気は足許から容赦なく這いのぼってくる。どの家からも、湯気は濛々と流れ、鳥たちは飯を喰う。鳥たちだけが飯を喰い、汁を飲み干す。

女3 私たちは見ている、きりぶご、見ている。

女2 万華鏡の中の色紙のように拡散し、きらめき、浮遊する飢え、言葉に飢え、飯に飢え、人に

飢え……。

女3 りきぶご……おなかがすいた。

太鼓の音が止み、女たちは、座り込む。
と、男たちがやってくる。

7 記憶の祭り

少女は、男たちを指し招く。

男たちは、黒い網をすっぽりと被り、酔ったような足取りでやってくると、纏れ合って座り込む。

少女は、やさしく男たちに触れる。

すると男たちは話しはじめる。

男3 女という女を、赤鬼と青鬼に分ける。赤鬼は、よく喰う女だ。陽気で働き者で、お喋りだけでも陰にこもらない。

男2 とすると、青鬼は、胃袋が小さく、食が細く、あれが嫌い、これが食べられないと言う女だな。

男1 赤鬼は陽気な代わり、癩にさわると、顔を真っ赤にして怒鳴り散らすぞ。腹にしまっておくということができないからな。

男3 怒鳴られる方は、そりゃあ大変な災難って奴だが、しかしまあ、雷が通りすぎれば、ケロケロのケロと忘れてしまう。

男2 そこへ行くと、青鬼の方は、気に食わないことが起こっても、表情には現さないし、口に

も出さない。その代わり……。

男1 恨みが内にこもるから、長い時間をかけて、じっくりと仇をとられる。

男3 と、いうことだ。どうせ鬼と同居するのが男の定めなら、青鬼よりは赤鬼の方がまし、というのが俺の持論だ。

男2 それに、だ。赤鬼がよく喰う、ということは、喰うものがある、ってことだ。

男1 つまりは、御主人さまの力だ。

男3 その通り、その通りと俺たちは笑い、また一杯飲んだ。酒は清水のように喉を流れ、すると言葉が次々と生まれて来た。酒がさそう言葉だから、大抵は戯れ言だが、時には、本音もあつたりした。

男2、男3を見て、

男2 お前は俺に説教をし、それは正しかった。

男1、男2を見て、

男1 お前は俺に説教をし、それは当たっていた。

男3、男1を見て、

男3 お前は俺に説教をし、俺は頷いた。

男2 俺たちは代わる代わる説教をし合い、なんとか出来事の道をやって来た。同じ時間を同じ町で過ごして似たり寄つたりの俺たち。

男1 それでも俺は俺で、お前はお前で、違いを違いとわかり合うために、俺たちは酒と言葉を持ち込んだ。

男3 時にはののしり合いもした。言葉はカッと熱く喉の奥から飛び出して来て、お前を刺した。

男2 俺を刺した。お前を刺した。

男1 俺を刺した。お前を刺した。

男3 俺を刺した。お前を刺した。

男2 でたらめ馬鹿の糞つたれ。

男1 間抜け。

男3 阿呆。

男2 この野郎。

男1 あんぼんたん。

男 3 抜け作。

男 2 気違い。

男 1 ど助平。

男 3 犬畜生。

男 2 だが言葉の毒は一晩の内に抜けて、朝になると俺たちは、なんてこともなく、おはよう、なぞと言っていた。

男 1 こんにちは、とも言い、こんばんは、とも言っていた。

女たちが口を開く。

女 1 おはよう。

女 2 こんにちは。

女 3 こんばんは。

女 1 おやすみなさい。

女 2 いらっしやい。

女 3 ありがとう。

女 1 さようなら。

女2 元気ですか。

女3 また、明日。

女たちは、網をはずし、男たちを自由にする。挨拶の言葉をくり返しながら。

男1は、女2と、男2は、女3と、男3は、女1と、対になって座る。

男2 いろんな言葉があった。秋祭り。いい天気だった。ほんとの秋晴れで雲一つなく、田圃は黄色く熟してにこにこ笑っていた。

男1 川の流れも田へ水を注ぐ役目を終わって、悠々としていた。野原では、笛太鼓の音が湧き上がり、長い蔓の連なりの下では、誰もが仕事を休んで、よそ行きの着物に改め、朝から飽食し、大酔して、有頂天だった。

男3 腹ごなしに、酔いざましに、俺たちは唄い踊った。するとまた、腹が減り、喉が渇き、俺たちは、食べ、飲んだ。そうして、話した。引っきりなしに話した。

男1 それから言葉を寢床に持ち込んだ。

男2、女3に、

男2 お前は、浮かれ遊びで、遅くまで帰って来なかった。俺は、言葉で怒鳴りつけた。

女3 兄さんの馬鹿。

男2 そんな言葉もあった。

ふっと沈黙が訪れる。

立ち上がり、ダフの埒に向かう男4。

ダフ きぶりごを受け入れずに閉じ込められた俺。受け入れて町に住むあいつら。どっちも選べず、唾になったお前。俺は知っているんだ。お前が時々、俺の埒の外に来て、扉を開けようとしたことを。だが、お前の沈黙の力じゃ、この扉は開かない。俺の言葉の力じゃ開かない。

だが近づいて行く男4。

その時、不吉な羽音がする。

顔を見合わせる町の人々。

羽音は段々に大きくなって、夜を覆い尽くす。

闇が訪れる。

7 | A

近づき、遠ざかり、また、近づいて、大きな翼と、尖った嘴とで人々を攻撃する鳥たちの影。

町の人々は、逃げまどい、時に、嘴で体を啄まれ、時に、翼で体を打たれ、許しを乞う。

男 1 許してくれ。

女 2 許して。

男 2 もう使わない。言葉は使わない。

女 3 使わない。

男 3 俺たちは、きぶりご、と言う。

女 1 ぶきりごと言う。

人々は、走っては止まり、体を歪ませ、その行為をくり返す。

男 2 従順

女 3 尊敬

男 1 清潔第一
女 2 不潔は殺せ
男 3 朝、起きて
女 1 顔を洗って歯を磨く。

人々は口々に叫ぶ。

男 1 素直
女 2 恭順
男 3 親孝行
女 1 礼智
男 2 敬愛
女 3 崇拜
男 1 心服
女 2 忠義
男 3 畏敬
女 1 服従

男2 清潔第一
女3 不潔は殺せ

人々の動きは、呪わしげなものに変わってゆく。
頻りと鞭の音がする。

男1 りぶごき。私たちは清潔です。
男2 りぶごき。私たちは清潔です。
男3 りぶごき。私たちは清潔です。
女2 りぶごき。私たちは清潔です。
女3 りぶごき。私たちは清潔です。
女1 りぶごき。私たちは清潔です。

人々は、その言葉をくりかえす。
人々を哀しみ、自分の無力を哀しんで舞踏する、ダフと男4。少女は、できごとを見て
いる。
闇が訪れる。

8 出て行く

ダフと少女は、白い布を纏い、抱き合っている。その布の下に透けて見える裸身。白は、聖を意味する。

少女 沢山の道を歩いて来た。

ダフ 俺は、まだ道を知らない。

少女 家を暖めるために使った炭が灰になり、その灰が雨に崩されて周囲の土になかば融けかかった道。

ダフ それは、この町の道だ。家の中では、鳥たちが、ぬくぬくと肥え太っている。

少女 „清潔第一“のビラが、煉瓦の筋目ごとに破れ、風化したまま残っている道。

ダフ それは、この町の道だ。鳥たちは、言葉を封じ込め、文字で洗脳しようとしている。

少女 両側に、平屋建ての集落が土埃にまみれて、何の緊張もなく広がっている道。

ダフ それは、この町の道だ。住人たちは、きぶ、ごぶ、と、鷹の安寧を肯っている。

少女 飽きることなく蛇行と分岐を重ね、はるかかなたで建設中の物見の塔が、溢れだした白蟻の巣を塞ぎ止めるように町を遮断している道。

ダフ それは、この町の道だ。鳥たちは、高見から、住人たちを見張っている。

少女 私が見て来たのは、よその町の、よその道。

ダフ それでもいい。俺は知らない道を歩きたい。

少女 みんなを置き去りにして？

ダフ 置き去りにされたのは、俺だ。

少女 違う。

ダフ えっ？

少女 みんなは、あなたを祭ったのよ。言葉神。鍵のように、海の底に沈めることもできたのに、

みんなは、それをしなかった。

ダフ 失くしたものの、代理……。

少女 ええ。

ダフ そんな存在は嫌だ。

少女 出て行きたい？

ダフ 出て行きたい。空の鳥籠に青い鳥を閉じ込めたい。

少女 鳥よ、鳥よ、青い鳥

緑の豆の畑に、降りないで

豆の花が散れば

食べ物売りが泣いてゆく

ダフ 一緒に行きたい。

少女 自分の力、よ。私は、ここに入ることが出来る。出ることが出来る。入りたい、と、思うからよ。出たいと思うからよ。でも、あなたを出してあげるとは、出来ない。

ダフ 君の身の丈は、不安ではっきりしない。たちまち、普通の人間の丈に縮んだかと思うと、またたちまち、頭の先が空に届くように見える。君が、もっと頭を高く上げれば、空を突き破って、俺の視界から、消えてしまうかもしれない。

少女 言葉は伸び縮みする。……出て行きたい？

ダフ 出て行きたい。

少女 行きましょう。

少女は、鳥籠を持って出て行く。

そして階の途中でダフを待つ。

ダフは、扉に立ち向かう。

ダフ 出る。出て行く。出て行く。出る。

言葉を繰り返す、ダフ。

少女は待っている。

ダフは出る。

それから二人は町を出て行く。

9 道

女3を背負った男2が現れる。

女3の顔は、半分、黒色となっている。

女3を背から降ろし、座らせる男2。

男2 鳥たちの嘴が妹を啄ばんだ。

女3 ぶきりご？ きぶごり？ りごぶき？

女3は狂気に冒されている。

男2 俺は正座して出来事を見ていた。何も出来なかった。見ながら、見ながら、俺は子供時代を思い出していた。親父が、不意と家を出て行こうとすると、おふくろは髪に砂をまぶし、激しく地面を叩いて慟哭した。そんな時、俺はいつも妹をおぶって汽車を見に行った。汽車は、俺の家とは反対側の道の畑の中を走っていた。風だ。おふくろと親父が喧嘩をする時は、風。風が吹いた。

女3 ぶきりご？ きぶごり？ りごぶき？

男2 昔、昔、昔。この町には、道がなかった。外に続く、外から入る道はなかった。だが鳥たちは、道を作りながらやって来た。そうして道の上に汽車を走らせた。汽車。風。風が吹く。汽車に乗りたい。

女3 きりりき。ごぶごぶ。ごぶ？

笑顔で訊く。

男2、泣き笑いで、

男2 ぶご、ぶご。

女3の髪を撫でる。

笑う、女3。

男2 汽車に乗ることは出来ない。だから俺は、町の中の道を歩いた。犬が蝶々を追いかけている道を歩いた。妹をおぶって、歩いた。丘の上にもものぼって汽車を見降ろした。すると鳥たちに見つかって、追い払われた。

女3 きりりき。ごぶごぶ。ごぶ？

男2 ぶご。ぶご。歩いて歩き、歩き歩いて、俺はいつも、家に帰って来てしまった。外に出る道には、鳥たちが鈴鳴りになっていたから。

男2、沈黙する。

と、不意に、女3が、

女3 ゆめまち、あすまち、とりごろし。

呟く

男2 言葉だ……。。

女3 まちゆめ、まちあす、とりごろし。

男2 言葉を作った。

女3 まつまち、まつまつ、あしたまつ。

抱擁する男2と女3。

男2 ゆめまち、あすまち、とりごろし。まちゆめ、まちあす、とりごろし。まつまち、まちまつ、あしたまつ。

女3、くりかえす。作った言葉で、二人だけの会話を交わす、男2と女3。

男1と女2がやってくる。

女2は、孕んでいる。

男1 まあ、いいさ。

女2 そうね、いい、と思うことの中で、居続けるのね。

男1 俺たちは、いる。町に。町の中に。

女2 子供が、いる。腹の中に。腹に。

男1 一夜が実になって、いる。

女2 居続ける。

男1 鳥たちが寝静まった夜更け、俺たちは私語する。

女2 聞かせて。私たちに聞かせて。

男1は、イ・ユクサ李陸史の詩「青葡萄」を呟く。

男 1 わがふるさとの七月は

たわわの房の青葡萄

女 2 わがふるさとの七月は

たわわの房の青葡萄

男 1 ふるさとの古き傳説つたえは垂れ鎮みしづ

圓ら實つぼみに ゆめみ映うつらふ遠き空

女 2 ふるさとの古き傳説は垂れ鎮み

圓ら實に ゆめみ映らふ遠き空

男 1 海原のひらける胸に

白き帆のよどむころ

女 2 海原のひらける胸に

白き帆のよどむころ

男 1 船旅にやつれたまひて

青袍あおころもまとへるひとの訪るるなり

女 2 船旅にやつれたまひて

青袍まとへるひとの訪るるなり

男 1 かのひとと葡萄を摘まば

しとど手も濡るるらむ

女 2 かのひとと葡萄を摘まば

しとど手も濡るるらむ

男 1 小童よ われらが卓に銀の皿

いや白き 苧あせの手ふきや備えてむ

女 2 小童よ われらが卓に銀の皿

いや白き 苧あせの手ふきや備えてむ

男 1 葡萄の味は螺旋だ。

女 2 つるつると螺旋に喉をすべり落ちて行くわね。

男 1 ああ。

女 2 ええ。

男 1 は女 2 の腹に触れる。

女 2 は笑んでいる。

男 1 と女 2 が話している間に、赤ちゃん人形を抱きしめた男 4 が現れると、ダフが出て行った埒に続く階をのぼり、自ら閉じこもる。

男3と女1が体中の骨の在処ありかを確かめる歩行で現れる。

男3 前頭骨が痛むと後が前になる。出て行く。

女1 後頭骨が痛むと前が後になる。出る。

男3 頭頂骨が痛むと体に動作を命じられなくなる。出て行く。

女1 側頭骨が痛むと健忘症になる。出る。

男3 鼻骨が痛むと匂いを嗅ぎわけることが出来なくなる。出て行く。

女1 頬骨が痛むと顔が腫れる。出る。

男3 上顎骨が痛むと顎がはずれて。出て行く。

女1 下顎骨が痛むと喋れなくなる。出る。

男3 肋骨が痛むと安静第一。出て行く。

女1 胸骨が痛むとバラバラ。出る。

男3 上腕骨が痛むと雨が降る。出て行く。

女1 尺骨が痛むと脈が行方不明になる。出る。

男3 撓骨が痛むと気が狂う。出て行く。

女1 腸骨が痛むと内蔵の迷路を迷う。出る。

男3 坐骨が痛むと神経痛をおこす。出て行く。

女 1 恥骨が痛むと不妊症。出る。

男 3 椎骨が痛むとくらげ男。出て行く。

女 1 尾骨が痛むと猿になる。出る。

男 3 大腿骨が痛むと足が萎える。出て行く。

女 1 腓骨が痛むと悪い夢を見る。出る。

男 3 脛骨が痛むとお化けが出る。出て行く。

女 1 膝蓋骨が痛むと脚気になる。出る。

男 3 趾骨。人体中、折れてもいっこうに差支えないのはこの骨だけだ。出て行く。

女 1 出る。

男 3 出て行く

女 1 骨を折られる町を出る。

男 3 骨の折れる町を出て行く。

男 3 と女 1 は出て行く。

その二人に手を振る男 1 と女 2、男 2 と女 3、そして、男 4。

やがて町は夜の帷の中に沈んで行く。

定本

有限会社 而立書房 『鳥よ 鳥よ 青い鳥よ 岸田理生戯曲集Ⅲ』
二〇〇四年八月二十五日 第一刷発行